木曽三川 歴史・文化の調査研究資料

# KISSO

2011 冬

Vol.77

平成 23 年

地域の歴史

## 肥沃な平坦地に古代から発達してきた神戸町（ごうどちょう）

地域の治水・利水施設

## 揖斐川扇状地に位置する神戸町の治水と利水

歴史記録　濃尾地震と河川災害　第一編

## 国内史上最大の内陸型地震・濃尾地震

研究資料　諸戸　靖

## 長島輪中の形成と一向一揆に関する一考察

# 肥沃な平坦地に古代から発達してきた神戸町

**濃尾平野の北部に位置する神戸町は、古くから稲作が盛んな地域で、古代から中世にかけては、延暦寺領平野庄として文化・経済が発展してきました。現在は、岐阜市・大垣市に近いことから、工場誘致や住宅地が増加し都市化が進んでいます。**

揖斐川より神戸町を望む

## 古代から開けていた神戸町

岐阜県安八郡神戸町は濃尾平野の北西部に位置し、南北七・二㎞東西四・一㎞と南北に三角形をした肥沃な平坦地にあります。西に伊吹山系、北に白山山系を望み、東に揖斐川の清流、南に濃尾平野が広がる、古くから開けていた地域です。

原始・古代の遺跡や出土品は、揖斐川沿いの落合・斉田から弥生時代後期の土器が出土しています。扇状地上の北部地域は、出土品は少ないものの、早くから開けていた池田町に接続していることから南部より早く人が住んでいたとされています。

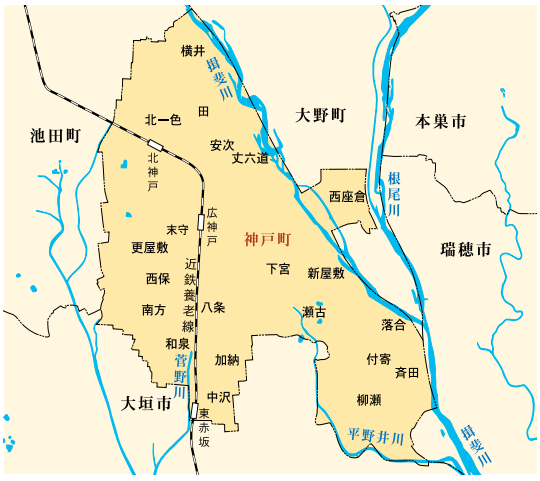
大和朝廷の支配が全国に及ぶに伴って官道が整備されました。都から滋賀・美濃・信濃の国府を結んで東国に通じる東山道もその一つで、延喜式には美濃の駅として不破・大野・方県・各務・・・と記されています。不破駅（大垣市青墓辺り）から大野（揖斐郡大野町・旧川合村）までの道筋が神戸町を通っており、当地が発展する一因となりました。

律令国家の基礎をなした行政区分では、当地は初め味蜂間（あはちまのこおり）評、後に安八磨（あはちまのこおり）郡に属していました。天智天皇の後継を、皇弟大海人皇子と皇子大友皇子が争った壬申の乱（六七二）において、大海人皇子は三人の舎人に「急に美濃国に往りて、安八磨郡の湯沐令多臣品治（ゆのうながしおおのおみほむち）に告げて、機要を宣ひ示して、先ず当郡の兵を発せ。仍、国司等に経れて、諸軍を差し発して、急に不破道を塞げ。」と命じたと『日本書紀』に記されています。安八磨郡は、現在の安八郡と大垣市の大部分及び揖斐郡南部にあたる平坦地を占めていたとされ、その大部分が湯沐邑（ゆのむら）という皇子の私領的性格の強い地域であったと解釈されています。

神戸町には、古代の土地区分である条里制の存在を示す五条・八条といった地名が残っており、近年の土地改良以前には、南北と東西方向に等間隔で平行に伸びる道路がありました。条里制については、律令国家の経済的な基礎である班田収受制の基盤として施行されたといわれてきました。しかし最近の研究では、班田収受制と条里制には直接的な関係はなく、墾田永年私財法の施行で盛んとなった富豪や有力寺社による農地開発の過程で条里制が広まったとする説が有力になっているようです。いずれにしても神戸町は古代から耕地の開発が進んでいた先進地域で、安八磨郡の郡家が神戸町神戸付近にあったといわれ、神戸の地名は郡所・郡戸から転化したと『濃飛両国通史』に書かれています。

## 平野庄の興亡

安八磨郡の大領であった安八大夫安次は、弘仁八年（八一七）天台宗の開祖・最澄に、当地での滞在を望み、善学院を建立しました。この折、最澄は自ら神像を彫刻して比叡山坂本の日吉神社を勧請したと伝えられています。当地には他にも、勧学院や瑠璃光寺（後に臨済宗）、信願寺（後に浄土真宗）、性願寺



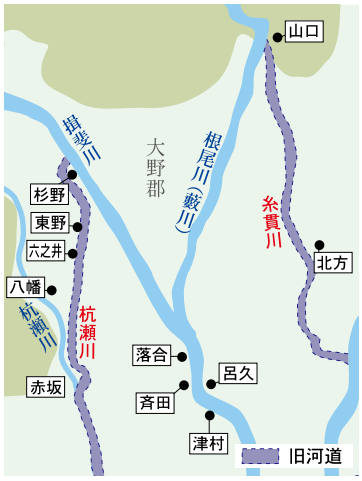
日吉神社

善学院

（後に浄土真宗）など最澄が建立に関わったと伝わる寺院が多くあります。

平安時代以降には、日吉神社、善学院、勧学院を中軸として、延暦寺領平野庄が発展しています。平野庄の起源や範囲は定かでありませんが、神戸町のほとんどが庄域に含まれていたようです。平野庄の山門衆徒・日吉神社神人は比叡山の権威を後ろ盾として、庄園拡張を図っていきました。

中世の平野庄については史料が少なく隆盛は明らかではありませんが、応仁の乱（一四六七～一四七七）では美濃守護土岐頼が京都への補給路を確保するため平野庄を押さえており、延暦寺の権威が行き届かなくなっていたようです。その後、織田信長の美濃進出によって、平野庄は全く消滅することになります。しかし、東山道の要所であった神戸は、日吉神社の神人の商活動が基礎となって門前町が発達していきました。



享禄三年の揖斐川・根尾川流路の変更

## 揖斐川流路の変遷

現在、神戸町の東端を流れている揖斐川ですが、かつては池田町杉野から南西に流れ、池田町六之井・八幡・市場を経て、さらに大垣市赤坂の東を通り、それより下流は現在の杭瀬川の河道を流れていました。

しかし、杉野付近で揖斐川右岸に合流していた粕川が土砂を東に押し出し、次第に揖斐川の流れを東に移していました。その流れが、享禄三年（一五三〇）の大洪水によって、杉野の東で南東方向に変わり現在の流路になりました。

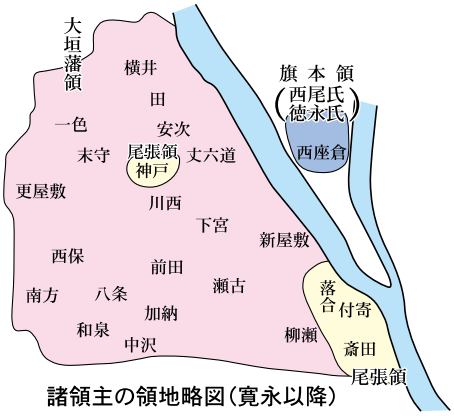
また、享禄三年の大洪水は、根尾川の河道も大きく変えました。それまで本巣市中央部を南流し北方町を経て瑞穂市生津で長良川に合流する糸貫川筋を本流としていた根尾川は、洪水によって、本巣市山口の西方、藪地内を突き抜けて西南に向かい、落合の東で揖斐川に合流する新しい流路・藪川（現根尾川）が生じました。

この大規模な河道変更は、神戸町域で壊滅的な被害を出したはずで、平野庄の衰微の一因にこの大災害を挙げる説もあります。

## 江戸時代の神戸町

関ヶ原の戦い時点での西美濃は、岐阜城の織田秀信を始め十九の領主が分立しており、その多くが西軍に組し除封となりました。替わって配置された大名・旗本も小領主で改易・移封も多く複雑な所領関係が生じていました。神戸町域も江戸時代初期には、八領主と寺社領に分割されていましたが、末期には、旗本領一村・尾張藩領四村とそれ以外は大垣藩領へと変遷していきました。

神戸の門前町は、東山道に替わって中山道が整備されたことで交通の要所としての地位を失いましたが、依然西美濃における物資集散の中心地でした。門前町の町並みは「大門通九町九間」といわれ、日吉神社正面に幅約十五mの大通りがあり、商家が軒を連ねていました。寛永十八年（一六四一）以降、商人は尾張藩に地子銀四九三匁を上納し、代償として尾張藩は新しい市場の開設を許さず市を保護しています。



諸領主の領地略図（寛永以降）

## 明治から現代へ

明治二二年（一八八九）の町村制施行によって、神戸村（四村合併）・斎田村（二村合併）・加納村（二村合併）が成立、その他の村々は独立村として存続しました。明治三〇年（一八九七）に神戸町（明治二五年町制施行）・北平野村・下宮村・南平野村の一町三村に統合され、昭和二五年（一九五〇）神戸町と北平野村（一部除く）合併、昭和二九年に神戸町・下宮村・南平野村（一部除く）が合併してほぼ現在の神戸町となっています。

江戸時代を通して、この地域一帯の商業中心地であった神戸の門前町は、明治一七年池野村（池田町池野）に市場が開設されると、次第に衰退していきました。

明治以降も稲作を中心としていた農業は、第二次世界大戦以後、施設園芸が盛んとなり、特にバラは中部地方随一の産地として知られています。また、豊富な工業用水を利用した繊維産業が発達し、昭和四五年の工業団地の完成後は、機械金属・窯業が伸び、製造品出荷額も飛躍的に伸張しました。一方で、大垣・岐阜方面のベッドタウンとして人口が増加し都市化が急速に進みました。

バラ団地内のローズガーデンG

■参考文献
『郷土の歴史　ごうど』　昭和五五年　神戸町
『神戸町史　上・下巻』　昭和四四年　神戸町
『岐阜県の地名』　平成元年　平凡社
『日本地名大辞典』　昭和五五年　角川書店

# 揖斐川扇状地に位置する神戸町の治水と利水

**神戸町の北部一帯は揖斐川の扇状地で、灌漑用水の確保に腐心してきた水旱地です。一方、南部の地域は低湿地で、常習冠水地帯となっており、水との闘いを繰り返してきました。こうした治水・利水の課題は、大正から昭和にかけてようやく解消されました。**

揖斐川（丈六道付近）

## 北高南低の神戸町

濃尾平野の最北部に位置し、揖斐川扇状地の一画を占める神戸町は、山地・丘陵地が無く全体に平坦な地形ですが、標高は北が高く南ほど低地となる緩やかな傾斜地となっています。北部の横井から海抜一五mの福井・更屋敷を結んだ地域は、横井を扇頂とする扇状地です。

この扇状地は、揖斐川が洪水を生じた際、流路を変えて網状に流れ、運んできた土砂が堆積してできたものです。扇状地より南部の地域は、揖斐川洪水でできた氾濫平野で、低湿地となっており、集落は揖斐川に沿ってできた自然堤防（二～三m）上に発達してきました。

## 神戸町の用水事情

扇状地は、水の浸透性が高い砂礫が堆積しているので、神戸町北部では「ざるかご田」と呼ばれるような保水力の低い田地が多く、さらにわずかな日照りでも揖斐川の流れが細くなり、灌漑用水の確保を困難にしてきました。

泉鏡花の戯曲「夜叉ヶ池」の題材にもなり、広く知られる「夜叉ヶ池の雨乞い伝説」は、平野庄（神戸町）が大旱魃（だいかんばつ）に見舞われ、郡司の安八太夫安次が、小さな蛇に「もしそなたが雨を降らせるのなら、私の大切な娘を与えよう。」と願ったところから物語が始まっています。（安八太夫安次（あんばちだゆうやすつぐ）は、平安時代初期に実在した人物ですが、民間伝承を拾って伝説が作られたのは江戸時代です。）この伝説から、古代から江戸時代にかけて当地域が水不足に苦しんでいたことが判ります。

安次・石原家の夜叉堂

神戸町の河川は、東に揖斐川が流れ、池田町杉野で揖斐川から取水する平野井川が町の中心部を縦貫して、下流部は大垣輪中堤に沿って流れ再び揖斐川に流入しています。さらに東平野井川・菅野川・豊後川などの小河川が町内を流れており、これらの河川から取水する用水路が張り巡らされています。この地域での用水路開削の歴史は古く、嘉永三年（一一八四）七月一〇日に日照りに苦しんだ人々が、源頼朝に井水の開削を願い出たところ、頼朝は平野只八に井水を作らせ、「久瀬川の流れが絶えないかぎり、永久に一国の領主でも平野井に乱妨することを許さない。」と指令したと伝わっています。

東平野井川

複雑に張り巡らされた用水は、取水堰の位置や取水量を巡って、上下流や隣接する村々の間に利害関係が生じ、数多くの水争いが江戸時代に起こっています。主だった紛争としては、万治三年（一六六〇）から元禄二年（一六八九）頃まで続いた神戸村井水場の拡張をめぐる神戸・下宮村と横井・田・安次・丈六道村の紛争がありました。神戸・下宮村の井水場は四ヶ村の川原にありましたが、実態は余り水をもらう程度であったのが、井水場の拡張整備を図ったため、紛争となったものです。

宝暦四年（一七五四）頃から平野井組と揖斐井組の間で始まった井水場の位置についての紛争では、双方が実力行使に及び、江戸の奉行所に提訴する事態となっています。

夏季取水期に降雨が少ないと揖斐

川の流量が減って水不足になる当地域の用水事情は、明治以降も変わらず、昭和一五年揖斐川上流に西平ダムが完成したことで、ようやく解消に向かいました。その後、横山ダム建設と西濃用水の整備によって、安定した用水の確保が実現しました。

## 常習冠水地帯であった神戸町南部

平野井川（平野井川大橋より）

北高南低の地形である神戸町は、南端を大垣輪中の堤防が横切り、この輪中の外側を流れて揖斐川に流入する平野井川などの周辺は常習冠水地帯となっていました。もともと神戸町に面する揖斐川右岸堤防は、平野井川から上流部が霞堤となっており、頻繁に氾濫被害をもたらしていました。江戸時代には、数多くの被害記録とともに、堤防や猿尾などの整備が文書に残っていますが、こうした治水工事は対岸の村々や上下流の村々との間で利害関係が生じるため、抜本的な改修は困難で破損箇所の修復がほとんどでした。例えば、宝暦一〇年（一七六〇）一一月、横井・田・安次・丈六道・神戸の五ヶ村は、横井村の猿尾を延長し、それより下流の神戸村一番猿尾までの間に流籠を敷設するように願い出ましたが、対岸三ヶ村と利害が相反するので交渉が行われ、三ヶ村側も新たな治水工事を行うことで決着しています。しかし、その後、神戸村は対岸の工事が行われると水が強く当たるので、さらに流籠を築きたいと申しいれました。

石垣のある民家（斉田地区）

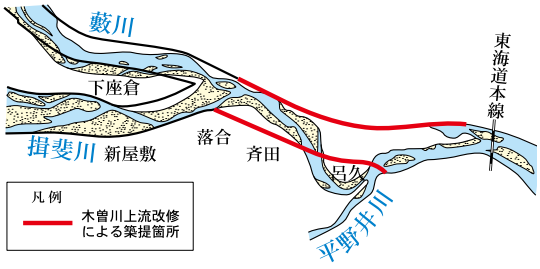
揖斐川右岸からの流入以上に頻繁に被害をもたらしたのは、大垣輪中堤に沿って流れる平野井川の氾濫でした。平常時には揖斐川に流入している平野井川は、揖斐川の水位が上昇すると排水されないばかりか逆流して、輪中堤と揖斐川にはさまれた柳瀬地区などで氾濫を繰り返しました。こうした状況は、明治になっても改善されず、「三年一年」（米の収穫が三年に一度しかない）、「水が一遍しかのらない」（一度冠水すると引くことがなく一年中水に浸かる）と言われていました。

現在の大垣輪中堤防（瀬古地区）

## 木曽川上流改修

明治二〇年（一八八七）に着工した木曽川下流改修工事（明治改修）が明治四五年（一九一二）に完成すると、以前より強かった、上流部の改修を求める声はいっそう高まり、政府は大正一〇年（一九二一）明治改修区間より上流の木曽川・長良川・揖斐川と支流の藪川（根尾川）・牧田川ほか支派川の改修工事（大正改修）に着手しました。

神戸町に係わる主な工事としては、揖斐川筋で最も大工事である呂久地先の新川付替えが最初の工事として行われました。本巣郡巣南町呂久地先（現瑞穂市）の揖斐川（右岸側は神戸町）は、川幅が狭く大きく湾曲しており、付近は無堤地であったため、両岸一帯の広大な区域で氾濫被害が大きかった。そこで、湾曲の激しい平野井川合流点付近から延長約一、五〇〇mにわたって直線的に新川を開削・築堤し、河道の付替えを行いました。工事は、大正一二年に着工、大正一四年に新川が竣工、通水しました。現在、神戸町と瑞穂市の境界が、呂久地先で揖斐川より西にくい込んでいるのは、旧河道が境界であったためです。



揖斐川・呂久地先の河道付替木曽川上流改修による築提箇所

また、揖斐川右岸神戸町落合地先から揖斐郡池田町杉野地先間延長約七、六〇〇mの改修を行い、田・安次・丈六道地内の無堤であった所を、一、一〇〇mの新堤築造によってこれを締切り、悪水対策として新堤に沿って新水路五五七七mを開削して平野井川に合流させました。平野井川の揖斐川合流地点には、逆流を防ぐため平野井川樋門が建設されました。

上流改修による揖斐川新河道

■参考文献
『郷土の歴史　ごうど』昭和五五年　神戸町
『神戸町史　上・下巻』昭和四四年　神戸町
『日本地名大辞典』昭和五五年　角川書店
『木曽三川治水百年のあゆみ』平成七年
建設省中部地方建設局

濃尾地震と河川災害 第一編

# 国内史上最大の内陸型地震・濃尾地震

**一八九一年一〇月二八日に、岐阜県本巣郡根尾村（現・本巣市）を震源とする濃尾地震が発生。日本における内陸型（直下型）地震としては、史上最大の規模で、岐阜県・愛知県を中心に甚大な被害が生じました。**

## 史上最大の内陸型地震発生

一二〇年前の明治二四年（一八九一）一〇月二八日六時三七分一一秒、岐阜県西部揖斐川上流を震源とする史上最大の内陸型地震「濃尾地震」が発生しました。

この濃尾地震について、理科年表（平成二〇年度　国立天文台編）には次のように書かれています。

『一八九一・一〇・二八（明治二四）。三五・六度E、一三六・六度N。M＝8。岐阜県西部：濃尾地震：仙台以南の全国で地震を感じた、わが国内陸地震として最大のもの、建物全潰一四万余、半潰八万余、死七二七三、山崩れ一万余、根尾谷を通る大断層を生じ、水鳥で上下六m、水平に二mずれた。一八九二年一月三日、九月七日、九四年一月一〇日の余震でも家屋破損などの被害があった。』

岐阜測候所の観測によると地震は、はじめ約一〇秒間は上下及び水平動で南北へ震動。ついで大烈震となり、北西・南東へ震動。この間約五分間。烈震となって一秒後器械は破損して其の後測ることが出来なかったが、後は南北・南南西・北北東へ震動を感じたとしています。地震後二十八日午後一時までは、大地の動揺は間断なく続き、十月末までには烈震四回、強震四〇回を含み七一五回の震動があり、翌一一月も烈震二回、強震二九回を含み一、〇八七回の震動がありました。翌年は一月三日午後四時に強烈震が発生したほか、一年間に烈震二回、強震九七回、合計二、九九四回の震動が続きました。

## 濃尾地震と地震学

濃尾地震の発震時刻に複数の時刻が存在していました。これは明治一六年（一八八三）に岐阜測候所が定時観測を開始しましたが、また名古屋第一測候所が明治二三年（一八九〇）に創設されました。これらの測候所が何時から地震の観測を行っていたのかは明らかではありませんが、我が国の地震観測の始まりが明治八年（一八七五）で、内務省地理局において正式の地震観測が始まりました。明治一三年（一八八〇）には多数の煙突が倒壊した横浜地震がきっかけとなり地震学会が発足しました。

また、この年、振り子型地震計が製作されました。そうして、明治一八年（一八八五）には東京気象台より地震報告が出されるようになっていましたが、現在のように統一的な数値が出されるシステムになっていないため、岐阜測候所と名古屋測候所の観測値がそのまま使用されていたためと考えられます。

因みに、発震時刻は岐阜測候所では六時三七分一一秒であるのに対して、名古屋測候所では六時三八分五〇秒でした。

なお、明治二十五年（一八九二）には、濃尾地震を契機として震災予防調査会が発足し、建築物の耐震研究が始まりました。この調査会は、関東大震災を契機として東京大学に地震研究所が創設されたことによって発展的に解消しました。

## 震源地周辺の惨状

本巣市根尾水鳥の北方に生じた湖水

震源地となった岐阜県根尾村（本巣市根尾）では、その惨状は目を覆うばかりであって、特に水鳥（みどり）地内では高さ約六mに及ぶ大断層が発生し、現在もその地形を残し天然記念物として指定され、「地震断層観察館」内では断層断面を観察することができますが、地形の変貌は甚だしいものがありました。根尾村史にはその模様を次のように伝えています。

『この日、一大鳴動とともに左右の山

は忽ち崩壊して山形一変し、一時は暗黒になったという。村内の人家は殆どが全半潰、田畑は悉くその位置を変え、道路も橋も土に埋まってその原形を失い、根尾川河底も著しく高低を生じ、あるいは激流となり、あるいは淵となった。これは能郷地内の藤谷で直径四kmに及ぶ土地が陥落したために起ったもので、その最もひどかった水鳥地内では、南西側が五・五mも沈下したといわれ、水平に二・五mも横すべりした。そのため、岐阜市に通ずる県道はこの断層で断ち切られ、根尾川はせき止められて氾濫し、いたる所に湖水ができた。特に水鳥の村下から板所の村下にかけての湖水は最も大きく、それに湖水の為唯一の幹線道路が遮断され、以来大正になるまでも舟をもって交通の便をはかったほどであった。』

大垣市（竹嶋町）の震災（瀬古安太郎撮影）

## 南北に走る裂線

強烈な地震動を伝える震裂波動は、震源地を中心として南東へ走り、第一線は高富町を通り各務原市鵜沼の西を経て愛知県方面に向かい、第二線は、本巣市金原の東、山県郡境で第一線から分岐し、方県郡を経て岐阜市の西を通り笠松町の東から一宮市木曽川町及び一宮市中心に向かいました。また、第三線は、震源地から大井・水鳥・宇津志・高科・岐礼・府内から結城・黒野の西を経て神戸大垣を南下し、中島郡の西端から木曽川を渡り愛知県に入ったと言われています。

また、日本海側に対しても三線の裂線があり、各地に土地の陥落・隆起・崩壊・埋没・築堤道路の破壊・土砂噴出等の地形の大変貌を生じています。

特に濃尾地震として注目されるのは根尾谷に生じた地震断層で、一般には地下にあるため確認し難いのですが、水鳥地区（本巣市根尾）では、上下方向に最大六m、水平方向に約四mの断層崖を地表に現しました。この根尾断層は能郷白山付近から本巣市根尾を経て、本巣市本巣町川内東方に至る延長三七kmの断層ですが、途中、中村地区や金原地区では最大八mの食い違いが出来るなど地震断層としては延長三五kmの断層が出現しました。そのほか伊自良村池原から関市柳洞付近に至る「梅原断層」や根尾谷断層の北西延長部にあたる「温見断層」などを加えると総計八〇kmの地震断層が出現しました。

根尾水鳥の地震断層崖

本巣郡北方町の惨状（岐阜県歴史資料館蔵）

## 海溝型地震と内陸型地震

地震には海溝型地震と内陸型地震の二つのタイプがあります。海溝型地震は海底においてプレート相互のぶつかり合いによってプレート境界面に発生する「プレート性地震」とも呼ばれるもので、東海地震や東南海地震などがその代表的な地震です。内陸型地震は、プレート間に加わるひずみエネルギーが境界面で解消せず内陸において断層を生じて発生する地震で、濃尾地震や阪神淡路地震などがこれにあたります。

我が国の周辺で発生する海溝型地震の最大はM８級で、多くは津波を伴って広い地域に大きな被害を与えています。

これに対して内陸型地震は最大M７級で海溝型地震に比べれば、そのエネルギーは一桁小さい地震ですが、しかし、この地震は我々が住んでいる直下で発生するため局地的であっても激しい揺れをを伴い、人命や家屋財産・公共施設に甚大な被害を引き起こすことが少なくありません。

表は明治以降現在までに発生した海溝型地震と内陸型地震の上位一〇位を一覧表としたものです。海溝型地震がM８級であるのに対して、内陸型地震ではM７級であるにも拘わらず死者の数が圧倒的に多く被害の大きさを物語っています。

**海溝型地震**

| 地震名 | M | 死者数 |
|---|---|---|
| 三陸地震津波 1896 | 8.3 | 21,959 |
| 十勝沖地震 1852 | 8.2 | 28 |
| 平成6年北海道東方沖地震 | 8.2 | — |
| 三陸沖地震 1833 | 8.1 | (3,064) |
| 南海地震 1946 | 8.0 | 1,330 |
| 平成15年十勝沖地震 | 8.0 | (2) |
| 喜界島地震 1911 | 8.0 | 12 |
| 東南海地震 1944 | 7.9 | (1,223) |
| 1968年十勝沖地震 | 7.9 | 52 |
| 平成5年北海道南西沖地震 | 7.8 | 202 |

M8

**内陸型地震**

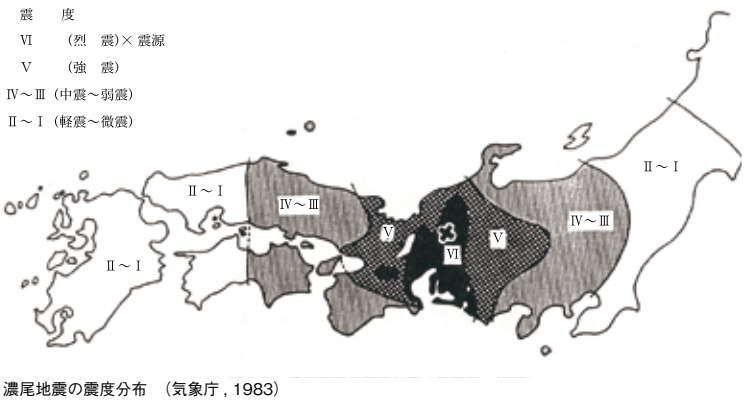
| 地震名 | M | 死者数 |
|---|---|---|
| 濃尾地震 1891 | 8.0 | 7273 |
| 関東大震災 1923 | 7.9 | (105,000) |
| 宮崎県西部地震 1909 | 7.6 | — |
| 丹沢地震 1924 | 7.3 | 19 |
| 北丹後地震 1927 | 7.3 | 2,925 |
| 北伊豆地震 1930 | 7.3 | 272 |
| 阪神淡路大震災 1995 | 7.3 | 6,434 |
| 鳥取県西部地震 2000 | 7.3 | — |
| 陸羽地震 1896 | 7.2 | 209 |
| 茨城県南部地震 1895 | 7.2 | 6 |
| 鳥取地震 1943 | 7.2 | 1,083 |

M7

海溝型と内陸型地震の比較

（　）行方不明を含む

## 被害の区域は東北から九州まで



濃尾地震の震度分布　（気象庁，1983）

地震の影響は、東は仙台から西は九州にまで及びました。震度Ⅲから Ⅳ（中震から弱震）の区域は栃木県から島根県までの広範囲に及び、震度Ⅴ（強震）の区域は群馬県西部から兵庫県東部まで達しました。

このため岐阜・愛知県を中心に一四府県で被害が発生し、死者七、八八五人、負傷者二一、三三四人、住家全壊九三、四二二戸、住家半壊七〇、〇二七戸、焼失家屋七、六七〇戸に及びましたが、震源地の岐阜県が最も大きく、次いで愛知県・福井県・滋賀県・三重県・大阪府に被害が顕著でした。

岐阜県と愛知県の死者数は七、七八六人で全国の九八・七％、住家全壊戸数においても九一、七八三戸と全国の九八・二％を占めているように両県の被害が突出しています。

愛知県西春日井郡枇杷嶋町堤防の崩壊　（岐阜県歴史資料館蔵）

## 甚大な岐阜県内の被害

岐阜県内の被害は、南北に走る裂線に沿って発生し、中島郡・羽栗郡・安八郡などを中心に、死者五、一四八人は全国の六五・三％を占めています。住家全壊数も五二、六九〇戸を数え、これも全国の五六・四％を占めているように全国の被害の約六割を岐阜県内で占めています。

その中でも震源地の根尾村（本巣市根尾）では、総人口四、二五三人のうち一、二五人が死亡し総戸数七九一戸のうち五〇八戸が全壊し、震源地近傍では全滅の状態でした。

裂線上にあった大垣町（現大垣市）の被害も大きく総人口の三・六％にあたる六七〇人の死者を出し、総戸数の八〇・一％にあたる三、五八六戸の家屋が全半壊し、また火災の発生によって多くの家屋が焼失しました。

この大垣町の被害は「濃尾震誌」によると、

『一震の下、万骨枯る。大垣町の惨状はこの言葉につきる。二十八日午前六時三十分頃大きな轟音と共に、大地が震動し、四千の人家は倒壊し、二万の人口は家の下じきとなった。ほこりがすごく立ちこめ濃霧のようにうすぐらくなったが、しばらくして土ぼこりがおさまった時、建ち並んでいた家は夢のように消え、倒れくだけた柱やはり・散乱する瓦などが一面にあらわれた。倒れた家々の下からは泣き叫ぶ声が聞え、まるで地獄のようなありさまとなった。生命だけ助かったが、深い傷を負った者も、屋根や壁をつき破ってどうにか外へ逃げ出した者もある。そのうち火災が起こり、次々と燃えうつって行く。』

また、笠松町でも総人口の四・二％にあたる二〇一人が死亡し、総戸数の九七・五％に当たる九八〇戸が全半壊し大半が火災により焼失しました。

## 木曽三川の被害

地震の被害は、人的被害や建物被害にとどまることなく、田畑や道路・堤防など大地の上に存在する全ての施設に及び木曽三川の堤防も例外ではありませんでした。

岐阜県においては、道路は約一、六八四km、橋梁も約一三〇ヶ所が破壊されました。河川堤防も約七五二kmにわたって破壊され、出水による二次災害が深刻な問題となりました。

岐阜県においては調査の結果、木曽三川の復旧工事のみでも延長一三六km、復旧工事費は約八一万円の巨額にのぼることから、到底県費の負担にはたえられないとして、十一月七日に内務大臣に対して木曽長良揖斐等震裂堤塘樋管修繕費御下付ノ義伺をたてました。

愛知県においても同様の事情でしたから、国は臨時支出金として、岐阜県一五〇万円、愛知県七五万円の合計二二五万円の支出を決定しています。因みに、明治二〇年に着手された木曽川改修工事（明治改修）の総予算額が四百二万円余でしたから、このことからも濃尾地震災害の大きさが想像できます。

■参考・引用文献

『理科年表』　平成二〇年　国立天文台
『岐阜県治水史　下巻』昭和二八年三月　岐阜県
『根尾村史』『濃尾地震から一〇〇年　今、防災を考える』『新修大垣市史　通史編二』
昭和四三年四月一日　大垣市
『木曽三川治水百年のあゆみ』　平成七年三月二十五日　建設省中部地方建設局

研究資料

# 長島輪中の形成と一向一揆に関する一考察

長島輪中の郷　館長　諸戸　靖

現在の木曽三川下流

## 木曽三川下流部の土地形成

現在は、木曽・長良・揖斐の木曽三川が分流され、伊勢湾に注いでいるが、もともとのこの地域の土地形成は、これらの川が土砂を堆積させ形成したものである。洪積世においては、伊勢湾が濃尾平野の奥深くまで入り込んでおり、現在でも平野部の山際においては海の生物の化石が見つけられている。では、この地域の土地形成が行われたのは何時ごろであったのかということについては、現在の考古学の成果からでも推定される縄文時代の海岸線や弥生時代の海岸線等から見ても一見、徐々に北から南に向かい土地形成が行われていったように見えるが、実際には発掘された遺跡をたどっていくという手法が用いられており、単純に海岸線というような線でつながるようなものではなかったと推定される。これは江戸期の絵図から見ても明らかなように河口部の土地形成は、干潟上のものが点在していっているため、海岸線というよりは点状の入り組んだ海岸を形成していたものと思われる。そこで堆積した土砂に集落が形成され始めると、必然的に堤防が作られることになる。江戸期の記録を見ても中州が形成されると、資本が投入され、堤防が形成され、新田輪中が完成する。この時点において堤防の内側（堤内地）は、水路と遊水地など土地活用ができない部分を除いてすべて水田として開発され、居住地として土地は、水田として使用できず、また、中州の中で最も高くて水害の危険性の少ない堤防上が当てられることになる。これは近代まで続くことになる。これらの痕跡は、現在の地図においても確認することができる。

## 古図から見た土地形成

中世以前に描かれた木曽三川下流域だけの絵図の存在が明らかになれば、土地形成の進行状況がより明らかなものになると思われるが、現在のところ信憑性のあるものの存在自体ほとんどない。このため参考となるものがないため、長島町史に描かれている古図を参考に考えてみる。（図1）から現在の長島や木曽岬付近が描かれているが、現在の大字程度の地名が記されている。木曽三川の輪中の形成にもかかわってくるが、ここから考えられることは、各島が後に輪中を形成していったものと考えられる。室町期に現在定義されているような懸け回し堤が形成されていたかどうかはわからないが、その元になるようなものが存在していたことだけは明らかである。実は、長島古今図考記によれば、元和年間の長島輪中の図を見るとすでに（図1）の島が七つの輪中を形成していたことが書かれている。また、同じ元和年中にはこれらの七輪中が一輪中にまとめられている。現在の集落の状況を照らし合わせてみると、長島では鰻江川上流の旧集落や木曽岬では上流部分に当てはめることができ、中洲が発達したものが大字程度の小輪中を形成し、それらが複合輪中化し、長島輪中などを形成していったものと考えられる。だから、長島輪中の上流部の旧集落については、室町期に形成された集落と考えられ、これらが懸け回し堤であれば、輪中の形成はその頃までさかのぼることになる。

図1

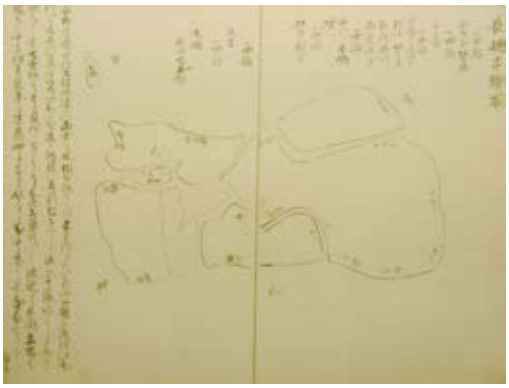
## 輪中の土地利用

輪中の形成から考え、その土地利用は、水田の開発にあったものと思われる。水の利用からも、中洲また

諸戸　靖　氏

1956年（昭和31年）2月13日生まれ。
関西大学文学部史学科卒業後、三重県教職員。
平成2年から長島町（当時）の輪中の郷の建設に関わり、平成5年、輪中の郷完成とともに輪中の郷職員。
平成19年より現職（館長）
著書：三重県史（輪中に関して）、木曽川は語る（共著）。その他雑誌等での著作。
論文：昭和前期の木曽三川下流域（土木史学会）

は丘陵下の堆積地においては、堤防の完成後、天井川化が始まり、堤内地と河川の水面との逆転現象が起こり、堤内への入水は容易になるものの、その排水は困難なものになる。このため入水に対してはあまり多くないが数箇所でできたが、排水に関してはさまざまな場所において樋門や樋管を通して、逆サイホンなどとともにいろいろな工夫が解かされている。つまり、輪中内においては、そのほとんどが水田であり、多くのところで長期にわたる冠水化現象がおきていたわけである。しかし、冠水による多量の水は同時に渇水期（秋から春にかけての冬季）の裏作栽培に適していることになる。江戸期には菜種の栽培が盛んになることからもこのことがこの地域における大きなメリットになったことは想像に難くない。これらのことから木曽三川下流域が過去現在を通して、穀物等の栽培に適しており、とくに稲作における水の確保については、他所では近年まで水不足になると水争いがおこったり、旱魃（かんばつ）になると収穫が激減するということがあったのとは裏腹に、洪水さえなければ収穫が約束された地であったと同時に、洪水によって上流から多量の土砂が流入することで、河川の氾濫は河口部においては、豊作が約束されるものであった。なお、江戸期には長島藩において長島輪中のほぼ中央部に東西にわたる井桁（いげた）が作られ、輪中内の上流部においての洪水を誘発して土砂の流入を行い、下流部の客土としたことが伝えられている。つまり、洪水を利用し、土地形成だけでなく、作物の栽培管理まで行っていたことになり、水との戦いというよりも水と共生してきたということになる。


江戸時代初期の長島絵図１

江戸時代初期の長島絵図２

## 流通経済の拠点としての長島

木曽三川下流域は、米作を中心とした穀倉地帯であることは、江戸時代の各藩の石高からも明らかであるが、全国でも屈指の作物の集散地としての位置づけもある。近年まで物流は陸上交通よりもむしろ舟運に負うことが多かった。江戸期でも全国で盛んに河川の掘削が行われ、舟運が物流の主流であったし、昭和になっても物資の輸送のためには伊勢湾と若狭湾を結ぶ運河が計画されたりしていた。しかし、中世においても木曽三川は、中部日本においては、流通の大動脈であった。当時の詳細な資料は、現存していないが、木曽三川の流域面積は現在とほぼ同じの四国の半分ほどの面積を占め、相当な山間部まで舟運があったことは間違いなかった。例えば、筏などは冬季の積雪を利用し、山頂付近から切り落とされ、筏場で組み立てられて、下流まで運ばれてきている。その間に中流域においては川港が発達し、船頭の入れ替えなどが行われたが、最下流においては、船頭の入れ替えだけでなく、筏（いかだ）の組み替えも行われており、一枚の筏がもたらす経済的効果は小さくはなかった。また、舟運では山間部や中間部で収穫された産物が河口付近に運ばれてきており、それらが河口では海舟に積み替えられることにより、物が動き人が動くことは多大な経済効果があったと思われる。なお、川舟は上流に向かって帰る際には、より軽いものを乗せる必要があったため、河口部で作られた灰が船倉に積み込まれ、上流部（山間部）での肥料として用いられた。これらの理由で、河口に位置する長島は、河川と海を結ぶ重要な接点であり、舟運の発達により中流部での川港以上に多くの物資が運び込まれ、経済の重要拠点となっていた。

江戸時代中期の長島絵図

## 一向宗と長島願證寺（がんしょうじ）

一向宗とは、浄土真宗を含む一向念仏を唱える宗派の総称で、現在のような明確な宗旨や宗派の区別はなく、浄土真宗自体も数多くの宗派に分かれており、伊勢国においても中勢には同じ浄土真宗の高田派の本山である専修寺があり、大きな影響力を持っていた。この地域における浄土真宗の教勢拡大は本願寺派の八世の蓮如によるところが大きい。特に長島では、願證寺誌によれば、その開基

は蓮如の子の蓮淳とされるが、実際には長島町誌にあるようにその以前に法泉寺というかなりの大寺があり、この地方一帯に大きな影響力を持っていたものと考えられる。しかし、蓮淳が入ってからはその勢力は一層拡大され、長島が東西交通の要衝でもあり、舟運における南北交通等の要でもあったため、長島願證寺の重要性は増していった。また、中世においての浄土真宗は、寺を中心に寺内町を形成することが多く、長島においても願證寺を中心とした都市を形成していたものと考えられる。このことは、川の河口が重要な経済拠点となっていたことからもわかるが、交通と経済・宗教をあわせてみると現在の長島とはまったく違う寺内町長島の存在をうかがうことができる。そして、中世の中ごろは現在の長島城付近において、海岸線があったと推定されることから中世の長島城は、伊勢湾の最奥の河口に広がる干潟に城域の形成があったものと考えられる。ただし、勢陽五鈴遺響によれば元亀元年までは長島城は伊藤重晴という中勢の長野氏の一族が支配していたとなっており、長島願證寺との関係は不明であるが、かなり近い距離に巨大な経済圏が重なっていたものと思われ、元亀元年以降はこれらのことから長島願證寺と長島城は互いに連携を取りながら木曽三川下流域や北伊勢方面を支配下においていたものと考えられる。

## 永禄年間から元亀・天正年間の長島

いわゆる戦国時代の後期の合戦は、石つぶての投げあいから始まり、弓矢や鉄砲など距離をおいた戦いがあり、やり合戦・組討と距離が縮まっていく。しかし、長島における合戦はどのようなものであったのかは、当時の資料としての信長公記によれば、相当大規模な戦いが三回以上行われている。戦いでの軍勢の正確な人数はわからないが、信長方だけで一回に五万人から七万人と言う膨大な人数が投入されていることになる。荷駄隊や雑用等の直接戦闘に参加しない人数を除くと、実際の戦闘にはその半数以下の戦闘員であったことと思われるが、木曽三川下流付近の地形を考えると、例えば、大垣から揖斐川沿いを南下するためには横隊ではなく縦隊で進まなければならなくなり、相当長い隊列(万単位での軍勢であれば数キロに及ぶ)が必要となり、長島に近づくにつれ、側面からの攻撃に対しての対応は、不可能になる。また、岐阜から最短距離の直線で南下する場合は、当事の木曽三川は網の目のように乱流していたはずだから、武器や武具を持っての渡川は軍勢の規模が大きくなるほど困難なものになってくる。その上現在でも長島と岐阜との高低差が一〇mほどしかなく、当事は堤防高も現在とは比較にならないほど低かったはずであり、当然大規模な建造物はほとんどない状況であるため、長島の堤防上からはるか岐阜近くまでは見渡せたに違いなく、現在でも多度山のふもとから充分に岐阜城を見ることができる。このため、濃尾平野の西南部の低平地での大規模な人の動きは手に取るように見えていたはずである。その上、明治の初めの資料でさえ、岐阜から桑名まで船で南下するには二日以上かかっており、いかに当時の時間の動きが現在とは違っていても戦闘に対応する時間はかなりあったはずである。

これらのことから長島一向一揆と呼ばれる戦いは、当時の木曽三川下流域を地形から考えて、信長公記に描かれている長島一向一揆の様子が、当時の事実であったとしても、例えば、低湿地帯であった長島周辺での馬の使用は不可能であったはずだし、下流域での島は、砦化しているはずだから、舟での移動は困難を極め、重装備の兵力の移動は難しかったはずである。また、大人数が集まるような広い場所があったかどうかは疑問であったし、一方的な攻撃ならいざしらず、双方が戦いあうような場所は存在しなかったと思われる。つまり、大規模な戦闘が一斉に行われるような場所も、縦横に走り回れるような場所も長島周辺では見つけることができず、現在の映像として見られるような馬に乗って勇壮に戦ったり、武装集団の海戦があったとは到底考えられないのである。

今後、戦国期の合戦を考えていく場合、当時の地形や景観を考慮に入れて考察を加えなければ、実際の時間の経過やその場での様子など現在の地図だけで判断することは非常に危険であり、実態とはかけ離れたものとなる公算が高いのである。

勢州長島合戦之図(江時時代)

■参考・引用文献
『長島町誌　上巻』昭和49年長島町
『長島古今図考記』
『願證寺誌』
『勢陽五鈴遺響』
『信長公記』

# 神明さんと洪水

神戸町田

いつのことだったか、大雨で揖斐川が氾濫し、田村でも田畑が泥に浸かりました。

村人が泥をかき出す作業をしていると、見知らぬ男たちがやってきて、

「自分たちは、津汲村の者ですが、村の大切な神明さんの社が流されたので、探していました。ようやくこの村の堤外の藪に流れついているのを見つけました。」

ところが、かついで帰ろうとしても、いっこうに社が動かないので、手伝って欲しいとのこと。

そこで田村の男たち五、六人が手伝って、藪の中の社を持ち上げようとしましたが、どうしたことか、社は全く動きません。

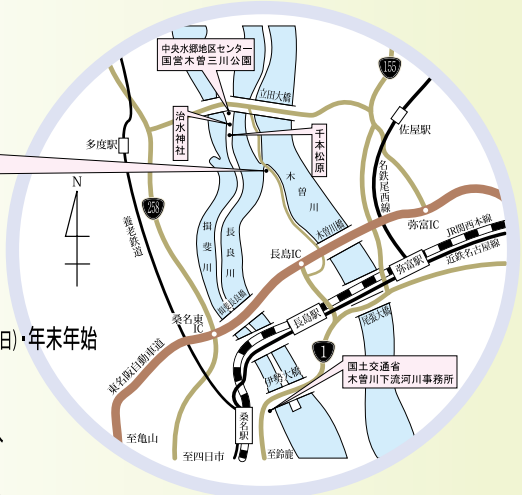
数日後、津汲村から一五、六人がやってきて、何度も持ち上げようとしましたが、社はさっぱり動かないので、津汲村の人たちは困ってしまいました。

この話を聞いた旅の修行僧が「神明さんは、田村に居たいと仰っています。」と言うので、そういうことならぜひ田村で祀ってもらいたいと津汲村がお願いしてきました。　引き受けた田村の人々が揖斐川へ迎えにいくと、不思議なことに社は軽々と持ち上がったそうです。

## 木曽川文庫利用案内

ヨハニス・デ・レイケに関する文献など約4,500点の図書などを収蔵、木曽三川の歴史を知るために、多くの方々のご利用をお待ちしています。

船頭平閘門
木曽川文庫




《開館時間》
午前8時30分～午後4時30分

《休　館　日》
毎週月・火曜日(月・火曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

《入　館　料》無料

《交通機関》
国道1号尾張大橋西詰から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

木曽川文庫ホームページ
http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/bunko/index.html

木曽川文庫へのお問い合わせは
〒496-0946　愛知県愛西市立田町福原
TEL.0567-24-6233　FAX.0567-24-5166
Mail　kisogawabunk@mist.ocn.ne.jp

Johannis de Rijke の日本語表示については、かつては「ヨハネス・デ・レーケ」と呼ばれていましたが、「KISSO」では、現在多く使われている「ヨハニス・デ・レイケ」と表記しています。

## 編集後記

今号より2編に渡り『歴史記録　濃尾地震と河川災害』を特集いたします。

明治改修シリーズ第一編～第七編はVol.61～67、第八編からはVol.74号～76号を参照下さい。

なお、この資料は、創刊号からの全てが木曽川文庫ホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

上
「平野井川」(瀬古付近)
大正改修以前は、揖斐川が洪水になると平野井川に逆流して、この地域一帯をしばしば冠水させていた。

中
「瀬古之池と堤防決潰之地碑」
明治二一年水害で大垣輪中堤が決壊した際の決壊地の碑。瀬古之池は、文化一二年に決壊した時に出来た切所池(押堀)である。

下
「揖斐川」(神戸大橋より上流を望む)
正面に見える橋は、新平野庄橋。古代・中世には、この辺りは延暦寺領平野庄であったことを橋名として伝えている。

『KISSO』Vol.77　平成23年1月発行

編集・発行　国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所調査課
〒511-0002 三重県桑名市大字福島465　TEL (0594) 24-5715　ホームページ　URL http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/